

NEWS LETTER

SEIGAKUIN NEWSLETTER

& Seig

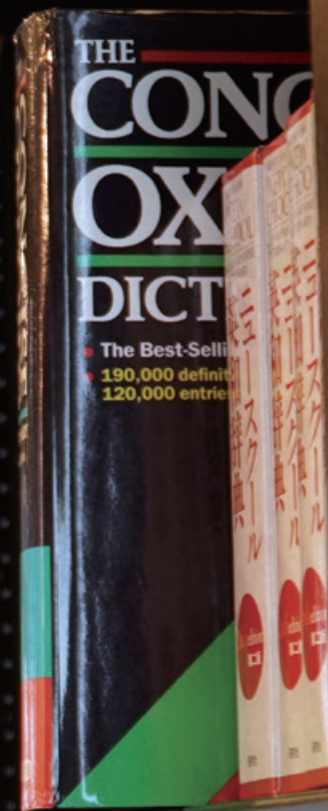
No.

274

Sep. 2019

対談

聖学院の英語教育



CONTENTS

- 01
&Talk [聖学院の英語教育]
- 05
focus-英語教育 [聖学院小学校]
- 06
focus-英語教育 [女子聖学院中学校・高等学校]
- 07
focus-英語教育 [聖学院中学校・高等学校]
- 08
focus-英語教育 [聖学院大学]
- 09
在校生の活躍
卒業生の活躍
- 11
Seig NEWS
- 14
Our Mission
- 15
聖学院歴史探訪

小学校で英語が教科化します。

指導者養成と現場ではどのような変化がありますか？

東 聖学院大学では「小学校英語指導者養成講座*」(以下養成講座)を約20年前から開催しています。小学校で英語を教える先生を支援する講座です。今年は申込開始2週間で50名の定員を超え、最終的な参加者は63名でした。小学校での英語の教科化への不安と、指導力・英語力の両面で能力を磨きたいという想いを強く感じました。一方で参加される先生方の英語力も年々上がっていて、ネイティブの先生が英語のみで話す講座でも、英語での冗談に対して笑いがおきます。

また、講師への質問の内容も変わってきました。従来は直近の授業に活かすためのテクニカルな質問が多かったのですが、来年配付される検定教科書や評価のことなど長期的な課題についての質問が増えています。

聖学院の 英語教育

誰一人取り残さない

& Ta



藤原 真知子

聖学院大学総合研究所客員講師。同研究所特任講師、東京YMCA児童英語教育ディレクターを経て現職。聖学院小学校英語講師(2003～)世田谷区立用賀小学校英語教育アドバイザー(2007～)Ottawa大学Cross-Cultural Program担当(1989～)。児童英語講師養成講座多数担当。日本CLIL教育学会監事。

小学校ではどのような英語教育をしていますか？

藤原 聖学院小学校では全学年に週2回の英語の授業があります。どのクラスにもネイティブの先生が入っていてコミュニケーションを楽しみながら、聞く・話す・読む・書くの4技能を学んでいきます。またCLIL (クリル) *2という、内容と言語を統合した学びを導入しています。例えば1年生は生活科で行う朝顔の観察と並行して、朝顔の成長過程に合わせた英語を歌、動作、ワークシート、グループ活動、思考活動、会話を通して学んでいきます。そうすると、つぼみが出たときは、「I see buds! Two buds!」など自然と子どもたちから言葉が出てきます。新学習指導要領*3についてのご質問ですが、キーワード、「主体的・対話的で深い学び」は、まさに聖学院小学校の英語教育で長いこと力を入れてきたことです。

東 養成講座でも何度も藤原先生とバード先生にCLILの講座を持って

いただいています。歌などのCLILの実践は受講者にたいへんな人気です。

滝澤 本で読んだだけの内容は忘れてしまいがちですが、身体を動かしたりある種の体験を伴って身に付けると定着率が高いです。そのCLILを学んできた小学生が女子聖学院に入学してくると英語が頭に入りやすいように思います。

東 指導者養成の立場からすると、公立小学校の先生に専門的な研究をする余裕がなかなかないので、藤原先生には聖学院小学校の実践をどんどん発信してもらえたらいいな、と強く思います。

中学ではどのようなところを大切にしていますか？

滝澤 中学では、英語圏で育った生徒も初めて英語を学ぶ生徒もいるので、このギャップを授業の中でどう埋めるかが難しいです。今まで英語を使い慣れてきた生徒にとって授業が居心地の良い環境であっ

2020年から小学校で英語が教科化し、大学入試では英語の外部試験が導入されます。

**小学校の英語指導者を養成している東先生、
小学校の現場で英語を教える藤原先生、
中高で英語を教える滝澤先生、
それぞれの立場からお話をうかがいました。**



滝澤 佳代子

女子聖学院中学校・高等学校英語科教諭。国際教育委員長。マレーシア、クアラルンプールの進学塾の所長・理事として、帰国生の中、高、大学受験指導に携わる。帰国後、日本国際交流振興会(JFIE)事務局次長、(株)アイエスエイ 留学センター長、広尾学園中学校高等学校講師を経て現職。



東 仁美

聖学院大学人文学部欧米文化学科教授。専門は小学校英語教育。小学校英語指導者認定協議会(J-SHINE)理事、トレーナー検定委員。欧米文化学科の児童英語教育科目や児童学科の小学校教員養成課程での必修科目を担当する他、都内の小学校での教員研修にも携わっている。

てほしいし、ほぼ初めて英語を学習する生徒に不安を持たせない方策も大事です。「絶対に一人も置いていかない」ことを前提に考えています。難しいタスクはグループワークで取り組ませることが多いです。そうすると元々得意な生徒は、他の生徒に教えてくれるので教室に一体感が生まれます。

またテストの難易度を上げることはいくらでもできるので、できる生徒にはつい難しい問題を解かせたくなります。しかし、テストよりも毎回の授業内の活動に負荷をもっとかけて、あらゆる生徒の授業への集中度・参加度を高めていくほうが重要です。中2ぐらいまでは平均点が高めになるようにテストの問題を作り、英語を心から楽しんで、もっとやりたいというモチベーションが生まれるようにしています。



大学入試の英語も変わります。

高校でポイントとなるところはどこですか？

滝澤 高校ではぐっと学習内容が難しくなります。4技能をバランス良く伸ばす必要があるのですが、理解するのに手一杯になり、生徒も今どこを伸ばしているかわからなくなります。生徒に何の力を付けさせているのかを意識させながら、指導していく必要があります。教員も学習指導要領の求める「4技能を使った思考力」「グローバル」などを目指す結果、コミュニケーションやグループ学習などが活動のための活動になりがちです。教員も何のためにやるのか理解し納得してから生徒に教えることが重要になります。

また大学受験においては外部試験が導入されはじめています。混乱もありますが戦術的に戦えるようになるとも言えます。外部試験ごとの細部には特徴があるので自分の得意分野はどれかを分析すれば有利になります。分析して、自分の長所と短所を見極める作業は悪いことではありません。そうは言っても生徒の負担は増えると思います。



聖学院小学校では児童が物怖じしませんね

藤原 そうですね。アメリカから来た大学生が小学校に遊びに来たときは、児童が次々集まって話しかけていました。大学生に「すごく積極的ですね」と褒められました。また成田のパイロットが泊まるホテルで英語キャンプ（英語のみを使う合宿）をしたときは児童が外国人の方に「食事を一緒にしませんか」とお誘いしたり、一緒にカルタをしたり日本の文化を積極的に発信していました。外国の方が来たら臆さず目を見て話すことができるのが聖学院の小学生かな、と思います。

また1年生から聞くことを重視し、聞いて理解できるから話しかけられるということがあると思います。聞けると、文章で返せなくても、イエスとかノーとか、ウーンとか言えるんですね。それでコミュニケーションができる。英語キャンプの外国人スタッフにも「意思疎通ができて楽しかったです」というお話をいただきました。毎日、ネイティブの先生と廊下で会えば話しますし、日々の積み重ねが効果を上げています。

東 小学校学習指導要領では、今まで5・6年生からスタートだったものが、3・4年生からの必修化になって、実際は1年生から実施する学校も増えています。聖学院小学校とは異なり体系立ったプログラムがない中で、何となく英語を取り入れようという学校もあるので、私は「英語と幸せな出会いをさせて欲しい」とよく言います。養成の立場として、先生が「嫌だな、教えられない」などと思ながら行う授業では、子どもたちが英語にポジティブな印象を持ってません。

一方、身振り手振りを付けながら、児童への質問を交えて楽しく授業をしている先生がいます。目の前の子どもたちを理解している担任だからこそできる指導方法だと思います。英語が得意じゃなくても「幸せな出会い」は作れます。英語のスタートが低年齢化していく中で、英語嫌いまで低年齢化しないようにすることが大事です。

滝澤 中学生になると、かなりの単語を覚えなければなりません。従

※1 小学校英語指導者養成講座

約20年前から聖学院大学で開催されてきた小学校英語の指導者養成講座です。小学校の学習指導要領に英語が組み込まれましたが、それまでは小学校での英語の指導方法の指針がありませんでした。そのため、主に小学校の教員を対象として、大学の研究をフィードバックし指導法を身につけてもらう目的で開催されてきました。また、小学校の新指導要領導入へ向けて、その解説も行なっています。

※2 CLIL(クリル)

CLIL(Content and Language Integrated Learning: 内容言語統合型学習)は、教科で学んでいる内容やトピックと言語の学習を統合した指導法。4Cと呼ばれるContent(教科/トピック)・Communication(言語)・Cognition(思考)・Culture/Community(異文化/協働学習)を結びつけながら、4スキルズ(聞く・話す・読む・書く)を高める。

来は「単語や例文は家で書いて覚えてくる」という考え方でしたが、今では授業で覚えるようにしています。すぐに書くではなく、とにかく言って言って、文章を覚えて、正しい発音で言えるよう何度も言ってから、初めて書きます。書く前に難しいスペルにマーカーでラインを引いて、後は見ずにI回だけ授業で書きます。I回しか書いていませんが、そのI度を書くまでに、徹底して言えるようになるまで、しっかり見て、注意して、と頭をつかって書いているので、7~8分時間をさくだけでパラグラフ全文が書けるようになります。そうすると「これだけやればできるんだ。だったらやった方がよい」という考えになり学習スタイルが定着して、正のスパイラルになります。そこまで教員が付き合い続ける必要があります。単語学習が一番つらいところだから、共有の場にしています。



東 英語は自己実現のきっかけだと思います。だからTOEICの授業の時に、大げさですが、「これは生き方の授業だよ」と言うようにしています。「TOEICの点数が目標ではなくて、今までできなかった事ができるようになるのが大切だから」と。そういう言い方をするとツボにはまって、今まで無理と思っていた英語が急にできるようになる学生が毎年います。中にはTOEICがほぼ満点近く取れて、提携校に1年間留学できたりする学生もいます。いつでも学び直しができるというのは聖学院全体に通じる面倒見の良さの部分だと思います。小中高大学を問わず「教員があきらめない」「全員連れて行く」というところに聖学院の精神があるように思います。

滝澤 中高では探究型学習を行なっています。その中で生徒は様々なグローバル・ 이슈に興味を持って、自分なりに関心を深めていきます。その関わりの中で英語が必要になってきます。「ここで必要なんだ」と知る事は、モチベーションとして大きいし、ツールとしての英語

を知る機会として非常に良い事ですが、グローバル人材になることが目的ではありません。グローバル人材として、その先に果たすべき役割があります。何故グローバル人材になるのか、それはまさに”Serve His People” (人に仕う) ということだと思います。グローバル人材になるためだけの教育をしない。そこに目的があるのが、聖学院の教育の素晴らしさであり、教育者のよこびです。

学院内での連携もできそうですね

藤原 女子聖学院には素晴らしいイングリッシュラウンジ^{※4}があるので、小学生を連れてきて楽しい時間を過ごしたり、小中のネイティブの先生が入れ換わって授業をするといった形などで交流を持てば、もっと小中の連携が深まるのではないのでしょうか。

滝澤 そうですね。

東 みどり幼稚園で英語のレッスンを担当しているアリーダ・クラウス先生が、大学の児童英語教育のクラスを担当されているので、幼稚園のレッスンを見学したり、実践の場としてつながっています。

また今年から児童学科で、幼稚園教諭や保育士になる学生たちを対象に、子どもに英語を教えるための「Smile English (幼児の英語)」という授業科目ができました。ここでも学外授業でみどり幼稚園の授業を見学などできたら、と思います。昨年は、中高英語科教員養成課程の学生が聖学院中高の授業を見学に行きました。

藤原 小学校にも希望者がいればぜひ見学に来てください。学生も一緒に授業に参加できれば、児童たちも「お兄さん、お姉さんが来てくれた」と親近感を持つでしょうし、学生にも良い経験になると思います。これを機会に広がっていければ良いですね。



※3 小学校の新学習指導要領

現行の学習指導要領では、2009年から5・6年生で「外国語活動」という「聞く」「話す」を中心としたコミュニケーションの時間が週1時間(年間35時間)必修化されています。2020年に全面実施となる新学習指導要領では、その「外国語活動」が3・4年生からとなり、5・6年生では教科としての「外国語」が週2時間程度(年間70時間)始まります。授業の中では4技能(聞く・話す・読む・書く)が指導されます。

※4 イングリッシュラウンジ

昼休みや放課後に毎日開放しているスペースで英語の雑誌やDVDがある他、ネイティブの教員とのコミュニケーションも楽しめます。

focus* (英語教育)

英語を活用した取り組みを紹介します



(上)5年生は学習発表会で、世界の国について調べたことを英語で発表しました。
(下)楽しいゲームを通して、学習した英語を定着させます。

聖学院小学校

楽しく4技能を学習



サマーワークショップ2019

5・6年生の希望者対象のサマーワークショップでは、昨年オープンしたTOKYO GLOBAL GATEWAY (TGG)で英語を学びました。サイエンスやアートの英語アクティビティが中心のTGGはCLILを取り入れている聖小との相性も抜群でした。

英語が使える小学生をめざす

日本の小学1年生は生活科の学習で朝顔の栽培をしています。聖学院小学校では1年生から英語を学びますが、英語の授業を生活科の学習と関連付けて行い、英語の歌などを歌いながら、朝顔の栽培を行っています。歌と経験が結びついて、児童たちは朝顔を見ると、自然と英語で朝顔の歌を口ずさむようになります。

聖小の英語の学びの特色は、聞く、話す、読む、書くの4技能の学びを大切にしていることで、それは1年生のスタート時から意識されています。4技能の中でも特に早い時期から力を入れて学んでいるのは「聞く力」です。相手が何を言っているのか理解することから、コミュニケーションは始まります。週2回の授業は英語で行われていて、歌やゲームを多用して楽しく学ぶことで、英語に抵抗感のない積極的な姿勢は身につきます。英語の学習は毎日の積み重ねが大事ですので、英語の授業がない日にも、できるだけ自宅でCDを聞くなどして、英語に触れてもらっています。そうして、児童たちは早期から、先生が何を言っているのかを理解できるようになっていきます。写真はバード先生の高学年生の授業。聖小では児童の「書く力」も大切にしている、一人ひとりに関心を払っています。

朝顔の栽培を取り入れている学習について触れましたが、このように他教科の内容を取り入れた英語の学習方法をCLIL (内容言語統合型学習) と言います。1・2年生は生活科の朝顔や大豆の栽培、3・4年生は地図記号や町の様子などの社会科や、昆虫の観察などの理科の学びを行い、5・6年生は日本の国のことや、食文化など社会科や家庭科の学びを取り入れて英語を学んでいます。3年生の授業中にサナギからチョウになったシーンに遭遇し、英語でCome on out, butterfly! と大いに盛り上がったことがあるのだそうです。

女子聖学院 中学校・高等学校

英語スピーチコンテスト



登壇者スピーチテーマ

①When are we going to save this planet?? ②Giving My Opinion ③Rethink ④Racism ⑤Fake News on Social Networking Sites ⑥Why are mostly love songs so popular in Japan ⑦Specialist vs Generalist ⑧Hospital Art ⑨Two Steps We Can Alleviate Discrimination

問いを立て、自ら発信する力

日本人の英語力に疑問を投げかける声は少なくありません。電車の中で、英語で苦勞する日本人と、それを解決するための英会話スクールの広告を目にする人も多いでしょう。

文科省の教育振興基本計画には、「グローバルに活躍する人材の育成」が目標に掲げられています。ところが、2018年度の調査*によると、全国の高校3年生のうち、CEFR A2レベル（英検準2級相当）以上を取得している生徒の割合は約4割。国が目標とする、5割以上には届かない結果となっています。

そのような背景の中、今年も女子聖学院中学校・高等学校では「英語スピーチコンテスト」が開催されました。このコンテストは女子聖学院で30年以上続く英語教育プログラムの一つ。予選を勝ち抜いた高1～IIIまでの9名の生徒が、自分たちの経験や考えを英語でスピーチします。採点は外部からお招きしたネイティブの審査員が担当し、最終的に1～3位を決定。全学年の高校生が真剣な眼差しでスピーカーを見守ります。

テーマの多くは、環境問題やSNSで他人を中傷するコメントに対する警鐘、あなたはスペシャリストかゼネラリストのどちらになりたいか?を問うものなど、社会課題と深く結びつくスピーチでした。「どのスピーチも非常にレベルが高く、例年以上にジャッジが難しかったと思います。」とは、英語科の滝澤先生の評価です。最終的には高IIの生徒が「Racism（人種差別）」をテーマにスピーチし、優勝。優勝者が決定した瞬間、応援する生徒たちの声援がチャベルいっぱいに響き渡りました。グローバル社会の中で、英検レベルの到達度は一つの大切な指標となることでしょう。同様に、スキルとしての英語力だけでなく「自分は何を伝え、何を解決したいのか」という問いを立て、自ら発信する力も、これからますます重要になってくるのではないのでしょうか。

※出典：文部科学省平成30年度「英語教育実施状況調査」、中学生・高校生の英語力



(上)ネイティブ講師から表彰を受ける登壇者。
(下)プログラムの中でスピーチとは別に留学体験が報告されました。





(上)夏休みには、中2～高IIの希望者を対象に3日間の「フィリピンメソッド4技能研修」を実施しています。
 (下)ソーシャル・イシューについても学ぶ、塩田先生の英語の授業。

聖学院 中学校・高等学校

世界を知る英語教育



DJイングリッシュ

中学入学時、まずは英語に興味を持ち、好きになってもらうことが大切です。中1～中2で学ぶDJイングリッシュは、英語への関心を喚起する役割を担っています。

英語は社会とつながる大切なツール

日本において、日本にあるヒトやモノだけで賄える時代は終わると言いますが、まさにその通りで、今の中高生たちが社会に出る頃にはまったくそうした時代になっていると思います。そうであれば、英語は社会とつながるための大切なツールだと理解しなくてはなりません。英語教育について、英語科主任の井上渉先生にお話をうかがいました。

学校で学んでいることは、必ず社会につながらなくてはならないと思っています。学校は社会の縮図であるべきです。これからの社会において、英語はコミュニケーションツールとして必須であり、単なる受験科目に留まるべきではありません。社会科でクエストカップを導入していますが、その前提には「すべてのものを日本の中だけで賄うことは不可能。」という考えがあり、それは英語が果たす役割を明確にしていると思います。それでも、一方で英語が受験科目であることは事実。中高一貫の聖学院は、高校受験がないため、中学では受験以外の目標を定めることができますが、高校の目標の一つにはどうしても大学受験があります。もちろん高校では生徒が必要とする教育を提供していますが、中高ともに、コンテンツによって生徒の主体性を引き出したいと考えています。例えば海外の政治家のツイートや、ニュースなどをテキストに、本物の英語に触れて学びます。アウトプットを前提としてインプットを行っているので、すごい勢いでチャンネルが変わり、授業見学された他教科の先生はびっくりされます。英語科の教員は個々の知識や経験をもとに、独自の授業の型を構築しています。教員同士で、そうした型や手法を共有し、お互いの授業に役立てつつ、ブラッシュアップして生徒の学びに貢献しています。

聖学院大学

小学校英語指導者養成講座



小学校教員研修 外国語(英語) コア・カリキュラム

新学習指導要領に向けて、教員の指導力を平準化するた
めに示された研修カリキュラム。

コミュニケーションの喜びを学ぶ

2020年度からの実施に向けて、2018年度に小学校学習指導要領が改訂されました。新学習指導要領への移行期間2年目に入り、小学校では、新学習指導要領が目指すものを読み解きながら、新教材を活用した授業作りが進められています。そのような背景の中で、教員に求められる教育力とは何なのでしょう。今回で19年目となる「小学校英語指導者養成講座」が2019年7月13日(土)に聖学院大学にて開催されました。この講座は名称の通り、英語指導者が共に学び合い、小学校英語教育向上に貢献するためのプログラムです。講師として聖学院大学教授の東仁美先生、聖学院大学講師のアリーダ・クラウス先生、上智大学短期大学部准教授の狩野晶子先生をお迎えし、コア・カリキュラムの概要やコミュニケーションを生み出す授業の考え方、実践的なアクティビティについて学びました。

受講生は実際に小学校で英語を指導している小学校教員や児童英語講師ですが、座学だけでなくお隣同士での意見交換、英語を使ったアクティビティ、フィードバックなどを通して、プログラムが進むごとに受講生同士のコミュニケーションが深まっています。プログラム終了後も話が尽きず、情報交換を行う姿があちこちで見られました。

東仁美先生は、「小学校での英語の授業で大切なのは、英語力だけではありません。児童の発語や行動に対する即興性のある応答、いわゆるインタラクティブ・フィードバックでは、その学級の、この児童だったらこう返す、といった一人ひとりに寄り添う視点が大切。児童を知っている学級担任だからこそできる応答を大切にしてほしい。」と語ります。英語というツールを通し、コミュニケーションの喜びを実感することで、子どもたちの生きる力も育まれていくのではないのでしょうか。



(上)座学だけでなく、受講生同士のコミュニケーションも深められる。(下)休憩時間にはお茶菓子による交わりや、英語教材の販売も行われる。





C.F

活躍ファイル *No.09

女子聖学院高等学校 3年



橋本 和博

活躍ファイル *No.10

聖学院中学校・高等学校 2011年卒業
聖学院大学政治経済学部 2019年卒業

声を出し続けること、 行動し続けることの意義

在校生の活躍

女子聖学院高等学校の2019年英語スピーチコンテストで準優勝を受賞したC.Fさん。スピーチコンテストでは地球温暖化の問題をテーマにスピーチを行いました。中学2年生の時に、環境問題の活動家の方の話聞いたことから、この問題に関心を持ったと言います。地球温暖化という何か大きなことに感じますが、自分事として捉え、例えば電気や水の消費の節約をすることや、スーパーにショッピングバックを持参してレジ袋を貰わないなど、すぐにできる身近な努力をしてきました。しかし、一方で、こんな些細なことが何の意味があるのかと悩んでもいました。ある時、スウェーデン人の未成年活動家グレタさんの活動を知ります。グレタさんは二酸化炭素排出量を削減することを要求するなど、気候変動問題への警鐘を鳴らす活動を続けています。彼女の活動はやがて世界の注目を集め、若干16歳にして、気候変動枠組条約第24回締約国会議(COP24)に出席し、スピーチするまでになりました。若い彼女の声が入々の心を動かし、大きな環境活動へとつながったことで、行動し続けることの意義を知り、「多くの人に、自分のように、身近なことから行動し続ける大切さに気付いてもらいたい。」とC.Fさんは言います。コンテストのスピーチで大切にしたいメッセージは「環境を守りましょう」ではなく「私たちの活動はどれだけ環境を守ることに繋がっているでしょうか」という問いです。将来は、様々な国籍の人たちと一緒に、環境問題に取り組んでいきたいという夢を語ります。もちろん夢の実現には、英語が欠かせません。将来、彼女の行動が世界を動かす日が来るのではないのでしょうか。

聖学院の卒業生が ギネス世界記録に認定されました

卒業生の活躍

聖学院中高の卒業生で、聖学院大学の卒業生でもある橋本さんは、5月中旬にお台場で開催されたイベントCHIMERA GAMESのプログラムの中で、ギネス世界記録に挑戦。フリースタイルのアームロールという技で、2個のバスケットボールを1分間に腕の上をどれだけ回せるかにチャレンジしました。これまでの世界記録は70回ですが、橋本さんはその記録を大きく上回る84回を達成し、記録を更新。見事にギネス世界記録として認定されました。橋本さんは大学在学中からチームスポルディングに所属して、KAZという名前で活躍しているプロのバスケットボールフリースタイラー。2個のバスケットボールを巧みに操ってパフォーマンスを行います。

聖学院中高時代の思い出をたずねると、真っ先に出たのは担任だった相澤先生の名前。中学高校の6年間のうち、そのほとんどの期間である5年間を相澤先生が担任されたのだそうです。手が掛かる生徒だったので、本当にお世話になり感謝していますと照れ臭そうに笑顔で話してくれました。聖学院大学では地域社会を学ぶゼミに所属。ゼミで学んだ地域社会との関わり方は、現在の仕事や生き方の参考になっていると言います。

昨年、大会で負けて、失ってしまったバスケフリースタイル日本一の座を取り戻すことが今年の目標。「いつかは次のことを考えなくてはいけないのですが、今はとにかく、プレイヤーとして長くやっていけることを考えています。バスケットボールと一緒に旅をできたら良いですね。」今までも少し遠回りした道を歩んできている橋本さんですが、そんな生き方は純粋でとても素敵で、ますます応援したくなりました。

まだまだあります!

Seig NEWS

学生も生徒も教員も職員も
次のステップへと
日々新しい試みをしています。

聖学院大学



よいさっ!プロジェクトを実施しました

8月2日(金)～5日(月)、復興支援ボランティアスタディーツアー「よいさっ!プロジェクト6」を実施しました。東日本大震災から8年経ち、今も継続的に復興支援活動を行っています。今年は本学学生、聖学院中高生に加え、自由の森学園

の高校生が主体的にツアープログラムを企画しました。地域の方々との交流や、「釜石よいさ」では障がい者団体と連携して出店、復興公営住宅での花植えを行いました。



聖学院大学



&SEIG No.02を発行

聖学院大学の「今」と「これから」が見えてくるコミュニケーションマガジン『&SEIG』の最新号が完成しました。学生と一緒に作ったタグライン「一人を愛し、一人を育む。」をテーマにした広報誌で、今夏で3冊目の発行となります。在校生と卒業生の対談や、学生の疑問や悩みに教職員が答える「聖学院生の気持ち」、学生の暮らしに役立つマメ知識を紹介する「大学生活の知恵袋」など、盛りだくさんの一冊です。ご希望の方は大学ホームページの問い合わせホームよりご連絡ください。



聖学院大学総合研究所

2019年第1回ラインホールド・ニーバー研究会／組織神学研究会

7月29日(月)、聖学院新館(駒込)にてラインホールド・ニーバー研究会／組織神学研究会が開催されました。今回の研究会は「R・ニーバーの人間論再考：自由と罪との関係をめぐって」を研究主題として、聖学院大学心理福祉学部兼人間福祉学部チャプレン、助教の五十嵐成見先生より発題がなされました。



聖学院大学大学院



10月に「授業公開ウィーク」の実施を計画しています

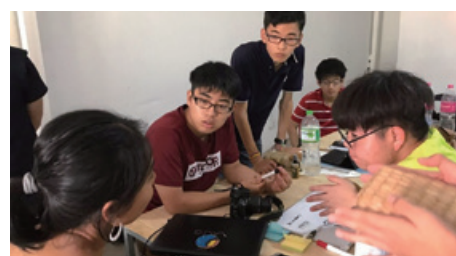
政治政策学研究科は10月14日(月・祝)～19日(土)の1週間を「授業公開ウィーク」として、授業の公開を行う予定です。公開する授業は事前予約制となります。最終日の10月19日(土)は、1限は吉川保弘先生、野田扇三郎先生のそれぞれのゼミを公開し、2限は特別に合同ゼミを実施し公開します。詳細は決まり次第ホームページ上で公表します。

聖学院中学校・高等学校



高校カンボジアMoG(8/1～11)

聖学院中高は今年からグローバル教育の1つのプログラムとして、NPO法人very50との共催で「高校カンボジアMoG」を実施しました。MoGとは、「Mission on the Ground」の頭文字をとっており、アジア新興国のチェンジメーカー(社会起業家)のもとで、SDGsに関するテーマをチームで取り組み解決に挑む活動のことです。今年度は28名の参加、ソーシャルベンチャー企業のRokhakとLavender Jeepの2つの企業に対して2チームに分かれて取り組みました。



※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。

※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」



聖学院中学校・高等学校



中高生ソーシャルデザインコンテスト優勝!

日比谷ミッドタウンで7月27日(土)・28日(日)に、リディアバ主催の「R-SIC (アールシック)」という社会課題をテーマにしたカンファレンスが開催されました。その初日に、「中高生ソーシャルデザインコンテストField Adventure AWARD 2019」というコンテストでは「変わりゆく社会を生き抜く、新時代の教育論」をテーマとしてパネルセッションが行われ、聖学院高校の生徒のグループが参加をし、ソーシャルデザインキャンプでの活動・プレゼンをもとにした発表を行い、見事、優勝することができました。

女子聖学院中学校・高等学校



高大連携プログラム「JSG大学」を実施

7月6日(土)、高大連携プログラム「JSG大学」を実施しました。今回は聖路加国際大学と青山学院大学経営学部マーケティング学科の講義を受講。青山学院大学の授業はワークショップ形式で行われ、「若い世代に新しいベッドをどう売るか」という課題にグループに分かれて取り組みました。例として「無印良品」のベッドは「友人を招き、ソファとしても使用できるような縁が固い」ことが紹介され、学年を超えて熱心に議論されました。JSG大学は6月にも実施され、東邦大学薬学部、東京女子大学現代教養学部国際社会学科の授業を受講しました。



女子聖学院中学校・高等学校



今年50回目の理科見学旅行

7月15日(月・祝)～18日(木)の4日間、理科見学旅行を実施しました。女子聖学院中高の理科見学旅行は1970年にスタートしていて、今年の実施は、実に50回目。対象は中2～高3の希望者で、リピーターの生徒が少なくありません。今年は、世界遺産の八幡製鉄所見学、「星の文化館」天文台での天体観測、阿蘇でのパラグライダー飛行体験など充実したプログラムで、北九州と阿蘇の見学旅行を満喫。物理、化学、生物、地学の理科の4分野の学びをバランスよく組み入れて



よく組み入れていて、旅行前には10回以上の事前学習を行いました。

聖学院小学校



オーストラリアホームステイ

7月17日(水)～25日(木)、オーストラリアホームステイプログラムを実施しました。ホストファミリーの家に宿泊し、MCSS (Mountain Creek State School) での学びが中心となるプログラムです。「エンニチ日本語クラス」という企画で、折り紙やけん玉、福笑いなどの日本文化をMCSSのお友だちに伝えたり、「Aussie Rules」と呼ばれる、日本ではあまり知られていないフットボールを教えてもらったり、動物園で南半球のめずらしい動物たちと触れ合うなど、多くの学びと貴重な体験に満ちた9日間を過ごしました。



聖学院小学校



「思考力体験授業」を実施

夏休みに入って間もない7月18日(木)、聖学院中高の教員による、レゴブロックを使った「思考力体験授業」が行われました。授業は5・6年生の希望者が対象。児童たちは、楽しく、真剣にレゴブロックを組み立て、そして、たくさん「考える」経験を通して、新鮮な自分を発見できたようです。



聖学院幼稚園



夏季保育

聖学院幼稚園では、毎日保育後18時まで預かり保育を行っていますが、一昨年より、7月の間の夏季保育も始めました。今年度は7月22日(月)～31日(水)の(土日)をのぞく8日間行いました。通常の保育同様、朝の礼拝から始まり、その後のプログラムは参加人数、学年に合わせた活動や自由遊び、そして暑い時期ならではの水遊びもしました。園庭に並んだ4つのビニールプールで暑い日も楽しく過ごしました。



聖学院幼稚園



体験入園

7月18日(木)・19日(金)、聖学院幼稚園での生活を実際に体験していただける「体験入園」を実施しました。最初は園内に慣れてもらうため、お部屋で自由に過ごしました。緊張がほぐれた後、ホールではご家族の方と「だんごむし体操」で元気に体を動かし、礼拝を守りました。教師たちによるペープサートでは声上がり、子どもたちも大喜び。その後は楽しいおやつ時間を過ごし、最後は教師による絵本の読み聞かせを行いました。



聖学院みどり幼稚園



年長お泊り会

年長お泊り会を7月5日(金)・6日(土)に実施しました。開会礼拝をやり、夕食下ごしらえ後に「上尾市自然学習館」へ。色々な昆虫のお話を聞き、子どもたちは大興奮でした。名残惜しくも「清河寺温泉」へ移動し、お風呂タイム。夕食後には映画鑑賞、花火などを楽しみました。翌朝はチャペルまで散歩し、初のラジオ体操をしました。朝食後には前日見学した昆虫をモチーフに工作し、年少・年中のお友達にプレゼント。最後はお迎えの保護者の方々への報告会を行いました。



聖学院みどり幼稚園



夕涼み会

毎年恒例となっている夕涼み会が8月23日(金) 夕方17時より行われました。天気が心配されましたが、日が沈むころには薄日も差して無事に開催となり、400名弱の園児や保護者などが集まりました。人気の綿あめや、かき氷、フランクフルト、焼きそば販売に加え、先生たちが趣向をこらして考えたゲームやおもちゃ製作に夢中になって取り組む子どもたち。現在ではあまり見られなくなった16ミリフィルム映画上映会も盛況です。この夕涼み会は在園児だけでなく卒園生たちも集います。小さな同窓会のように再会を喜ぶ親子の姿があちこちで見られました。最後は、暖かい雰囲気の中で打ち上げられた花火に歓声があがりました。



Our Mission

（駒込キャンパス）
聖学院小学校・幼稚園事務室



学校事務は、外から見ているとどんな仕事をしているのか分かりにくい部署だと思います。担当する業務は総務、経理、教務、広報など事務全般です。さらに、式典や行事、学校説明会などの運営にも携わりますし、時には脚立を担いで点検作業を行ったりもします。従来より教員と職員が協力して一つのことを行ってきましたが、最近はより一体感が強くなり会議や打ち合わせにも参加しています。例えば学校説明会の会議では、プログラムやコーナーの担当など主なところは教員が決定しますが、私たちは細部を確認して見落としがないよう多岐にわたってサポートします。

小学校・幼稚園は教員と保護者と職員が一体となって児童園児を日々見守っています。私たちは児童園児や保護者とも日常的に接する機会がありますが、特に児童や園児には普通に事務室にも遊びに来るほど親しんでもらっています。入学入園の時から成長を見守っているため、不安で毎朝泣いてばかりいた子が、立派に卒業卒園を迎えるときには感無量になります。教員による充実した教育のサポートができたことを実感し、やっぴいてよかったなと思う瞬間です。よく「事務室はいつも穏やかでニコニコしてるね」と声をかけていただきます。私たちがそうあることで、児童園児にとって小学校・幼稚園が安心して過ごせる場所になってほしいと思っています。また外部の方が最初に接する場所が事務室です。私たちの対応で聖学院のイメージが決まってしまうこともありますので、いつでも誰に対してもきめ細やかに接するよう心がけています。そしてこれからも事務室はそういう場所でありたいと思っています。

Our Mission

1. 児童園児を中心に判断する
2. 「安心して通える」を実現する
きめ細やかな対応
3. 事務のプロフェッショナルとして
知識や技術を深めていく



●STAFF

渡辺愛未・森谷倫子・小川美希・皆川明里・松野聖子・坂村哲也・石井三枝子

●オフィス

聖学院小学校 IF

聖学院歴史探訪

#6 聖学院を つくった人々 -平井庸吉-



平井庸吉先生は、1871年（明治4年）、兵庫県明石に生まれました。長じて同志社で学び、つづいて東京専門学校（現在の早稲田大学）で学びますが、その間ディサイプルス派の宣教師ミス・オルダムを通してキリスト教に深く触れ、洗礼を受けました。その後、伝道者となる召命を与えられ、ガイ博士が開校した聖書神学校に入学、卒業後は大阪へ派遣され、来日したクローソン先生と伝道の労苦を共にしました。

1904年、クローソン先生の尽力のもと女子聖学院が創設されますが、クローソン先生は当初より平井先生を女子聖学院に迎え入れたいと願い、1908年に「女子聖学院で一緒にお働きください」と懇願しました。平井先生は、初め、教会への奉仕とクローソン先生の願いの間に立たされて大変悩みましたが、祈りの中でそれを受諾、翌年から女子聖学院で奉職することになりました。

1924年に第2代院長、1930年に聖学院中学校校長を兼任した平井先生は、女子聖学院を「とこしえに生ける神の宮」、「魂なる道場」、「魂の故郷」とも呼びました。そのように、平井先生にとって、女子聖学院は、何よりも生徒の魂に救いをもたらす神の愛の懐であったのです。そして、その信仰の言葉は、今も学院に集う者の心に響いています。

出典:聖学院・女子聖学院中学校高等学校 聖書科教科書編集委員会編「神を仰ぎ人に仕う一召命に生きた人々」改訂版、聖学院大学出版会、2014年（出典より一部変更）



学校法人 聖学院

理事長/清水 正之 院長/山口 博

〒114-8574 東京都北区中里3-1 2-2 Tel 03-3917-8351
ホームページ <https://www.seig.ac.jp/> E-mail pr_h@seigakuin-univ.ac.jp

■さいたま上尾キャンパス

聖学院大学

・政治経済学部/政治経済学科 ・人文学部/欧米文化学科 日本文化学科 児童学科 ・心理福祉学部/心理福祉学科
学長/清水 正之 創立/1988年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号 Tel 048-781-0925

聖学院大学大学院

政治政策学研究所/アメリカ・ヨーロッパ文化学研究所/人間福祉学研究所
創立/1996年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号 Tel 048-780-1801

聖学院みどり幼稚園

園長/山川 秀人 創立/1978年
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820 Tel 048-622-3864

■駒込キャンパス

聖学院 中学校 高等学校

校長/角田 秀明 創立/1906年
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1 Tel 03-3917-1121

女子聖学院 中学校 高等学校

校長/山口 博 創立/1905年
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-2277

聖学院小学校

校長/佐藤 慎 創立/1960年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1 Tel 03-3917-1555

聖学院幼稚園

園長/佐藤 慎 創立/1912年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2 Tel 03-3917-2725

●インターネットでの寄付のお申し込みについて

クレジットカード（VISA、MasterCard）をお持ちの方は、お申し込みから入金までご自宅等で、PC、スマートフォン、携帯電話からインターネットによるお手続きができます。下記URL、QRコードにアクセス下さい。

<https://www.seig-asf.jp/fund/>



住所変更・お問い合わせは下記までお願いします。

学校法人聖学院ASF事務局 Tel 03-3917-8352